UrbanDesignLab.Magazine
都市デザイン研究室マガジン

古からの西方の息づかい

West Region's Breathing from Ancient Times

vol. 282 /
August. 31st 2019
8

太陽が照り付ける真夏の近畿。
むっとする熱気の中、歩を進めればほら、
ここには 1000 年を超える時が息づいている。
今回は近江・宇治・天理・生駒・山崎を巡った
研究室旅行について特集する。

—Contents

P1~P7　近畿のまちを訪ねて
P2~3　DAY1 滋賀
P3~6　DAY2 宇治・天理
P6~7　DAY3 生駒・山崎
P8　よりみち絵日記 + Information

近畿のまちを訪ねて

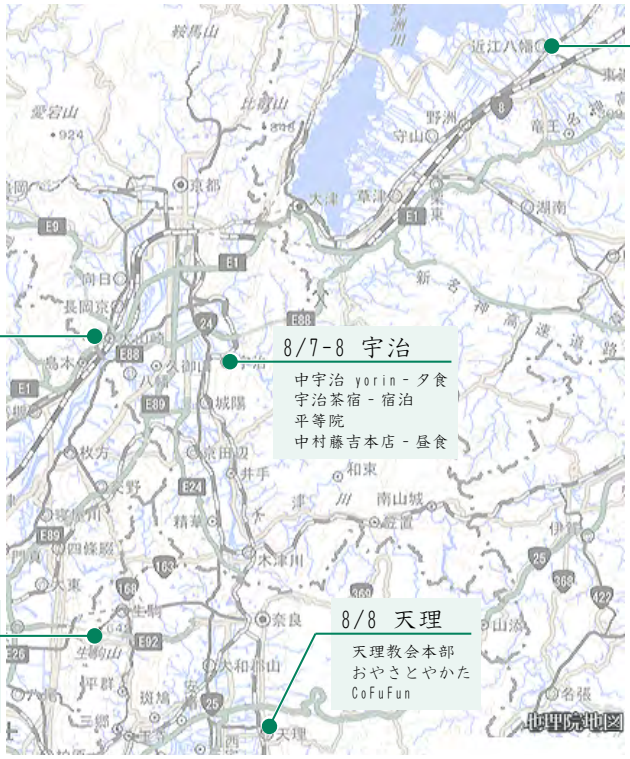
Visiting cities in Kinki area

text_OTAKE / M1

都市デザイン研究室では２年に１度のペースで研究室旅行を行っている。例年は過去に研究室に留学されており、現在大学教員を務めている方を訪問し、WS や提案発表などを行うという形式で行われている。過去の研究室旅行の概要は各年度の当紙で取り上げているので、詳しくはそちら (昨年度のものは Vol.272) をご参照いただきたい。

昨年度は旧満州に訪れたため、今年度の企画は無いかと思われたが、平等院の保護・改修に携わる宮城教授が研究室に加わったこともあり、今年度は宇治を中心に近畿をめぐることとなった。海外ではなく国内、WS ではなくまちあるきがメインというややイレギュラーな形の研究室旅行だ。国内で、２泊３日という短期での旅行だったため、例年よりも学部生や社会人学生、博士学生の参加が多く、総勢 20 名という大所帯での行動になった。普段はなかなか顔を合わせない人同士での交流の機会にもなったようである。

訪問先の選定や事前調査は修士の学生が主体となって行った。右図に訪問先の一覧を示す。これらのうち平等院では宮城教授、天理教会本部では天理教徒職員の方、聴竹居では代表理事の松隈様を始めとする聴竹居倶楽部の方々にレクチャーおよび施設のご案内をいただいた。この場を借りて感謝申し上げます。



▲今回の訪問先。大所帯での移動であるため、レンタカーを利用したドライブ旅行とした。公共交通好きの幹事としては公共交通機関を利用したかったが……

DAY1　滋賀

text MAEYAMA / M2　MATSUMOTO / M1

研究室旅行の始まりは滋賀。自身も緑をまとい遠景の山をも取り込んだランドスケープで自然と一体化した建築、ラ・コリーナ。住民の手により再生された八幡掘。水路を生活のインフラとして活かす伊庭。水路を庭に引き込み隣家と水路を介したつながりをもつ五箇荘。琵琶湖の畔のまちでは、どこも水がそばにある暮らしが見て取れた。

ラ・コリーナ

2019 年の研究室旅行は滋賀県近江のラ・コリーナから始まった。ラ・コリーナはイタリア語で「丘」を意味する。和菓子屋の老舗『たねや』の本社があり、旗竿店としての機能を果たす空間設計がなされている。設計は建築史家である藤森照信。彼は各地で緑化建築に挑戦してきたが、このラ・コリーナにおける『草屋根』がその集大成と評されている。藤森照信は『たねや』の自然環境を考慮したいという企業コンセプトに共感し、『たねや』からの依頼を受けたという。設計において自然の要素を取り入れるという自身の挑戦を実践する場としてふさわしい機会だと感じ、敷地周辺にある森林に自生する樹木を建築材料として用いることにトライした。建物を取り囲む回廊の柱にクリの木を製材せずに原木のまま利用した。高さを低く抑えた軒先が好きだという藤森の設計趣向がその柱によって実現された。藤森のこだわりぬかれた設計意図にとどまらず、施工に関してもチャレンジングな試みが行われた。外壁の土壁、内装の天井の装飾などの施工に『たねや』の社員が参加することで、企業のコンセプトを社員が共有し、企業への愛着を待つきっかけづくりを実現したことは大変興味深い。

▲背景となる森と一体化する『草屋根』

▲『たねや』社員によって施工された炭を用いた天井の装飾

▲高さを抑え、クリの木を柱として用いた軒先

▲『見越しの松』が特徴的な江戸の商人屋敷の町並み

▲住民運動によって再生された水辺空間

近江の商人町

近江の商人町は江戸時代の商人屋敷が重伝建として保存されている。ただし、その町並みは単に江戸の商人屋敷が残っているだけでなく、一度は高度経済成長期に腐敗寸前までいっていた水郷を住民運動によって復活された魅力的な水辺空間経緯や近江の地で活躍した実業家であり、建築家でもあるヴォーリズによって設計された明治の洋風建築が混在する。その町並みはなんとも不思議な雰囲気を持つ。町並みにおけるそれぞれの要素を守ってきた人々の努力やまちづくりのプロセスは大変興味深い。

伊庭

内湖・西の湖を眺めながら東近江市伊庭町へ。伊庭は近江八幡のような商人町ではなく農村集落だが、内湖に接することもあり中世から交通の要所として発展した。住宅のほとんどが集落に広がる水路に接しており、現在でも水の傍での暮らしが引き継がれている。

伊庭のまちを歩くと、「カワト」と呼ばれる水路への石段がいくつも見られ、当たり前のようにそれが存在している風景に少し驚いた。この石積みは地元の石工や住民によって造られてきたもので、近代化に伴い鋼板への変更も検討されたことがあったが、「石積みでなければ意味がない」という住民の意見により棄却されたそうだ。

水路に架かる橋や階段には、側溝の蓋のような鉄製の部材やコンクリートによって、恐らくは住民の手でつくられたものも目につき、長く引き継がれてきたものと生活の中で産み出されたものが緩やかに混ざり合っているのが分かる。住民それぞれの空間に介入する力によって「身近なもの」のまま守られる水路が印象的だった。

▲水路と石垣の風景。奥の船は観光者向けの展示

▲石段と鉄材の新旧カワト

▲落ち着いた雰囲気の町並み

五個荘金堂

滋賀最後の訪問地は近江八幡と同じく重要伝統的建築物保存地区に指定されている五個荘金堂本町。こちらも近江商人発祥の地と言われているが、商売の町ではなく商人の「本宅」の町であり、重伝建にも「農村集落」として指定されるなどその性質は大きく異なる。

水郷のまちという点では共通するが、伊庭の後に訪れると修景された五個荘金堂は整然とした印象を受ける。大きな寺社や邸宅、それを囲む高い塀、家屋や蔵に凝らされた意匠からはこのまちの繁栄が窺えた。

▲移動中に西の湖を望む

▲修復がされている蔵。細部に飾りが見える

水郷のまちでは鯉をよく見かけました、大きい！

近江八幡の蔵。窓のかたちがかわいいです。

1 時間早く着いてぶらついていた近江八幡の白鳥川。水辺に降りるところがなく少し残念。

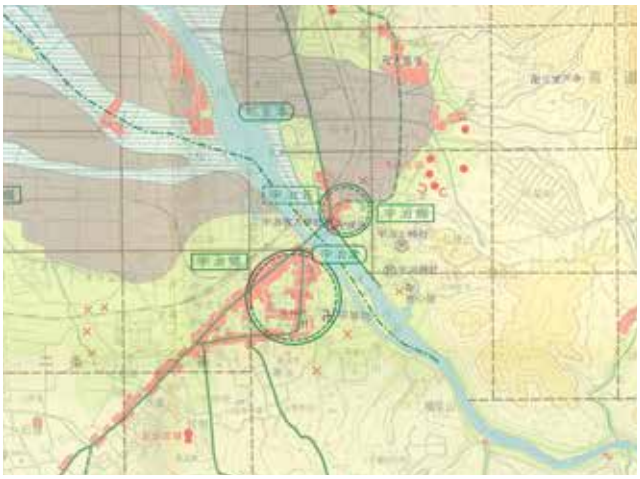
五個荘にて。
「とびだし坊や」のまち。

伊庭で鯉と戯れる皆さん。これも石段の使い方の一つでしょうか。僕は日陰で撮影に徹していました。

DAY2-1　宇治

text FUJIWARA / M2　NUMATA / M1

宇治では宮城先生のご実家である平等院、宇治の老舗茶屋である中村藤吉本店、そして宮城先生が携わる中宇治 yorin を訪問した。宇治は時代ごとにレイヤーを持つまちであるが、今回の訪問ではそうした「重層性」を大いに感じることができた。



▲現代の地図に古代の町割、街道等を重ねる
田川熊雄 (1973)「宇治市史 1 古代の歴史と景観」宇治市役所

平等院

宇治は宇治川がちょうど山間部から平野部に注ぐ場所に位置し、一帯が扇状地となっている。低平な地形や宇治川の水運などを背景として、古来から交通の要衝であった。大化 2 年に建設されたといわれる宇治橋は幾度かの架け替えを経た現在でも重要な位置にある。

この山地と河川が作り出す景色は平安時代の貴族から重宝され、風光明媚な場所として名を馳せた。その景色の美しさから、京西部の嵯峨、東部の醍醐とともに別業地として栄えた歴史をもあわせ持つ。別業地とはつまり別荘地のことであり、京の有力者たちが別宅を構え、そこから政治に参加したり、隠居生活を送ったりした場所である。宇治が源氏物語ゆかりの地であるのは、こうした貴族の居住が関係している。

別業として最も有名なのはやはり平等院であろう。平等院は元々、源融 (光源氏のモデルと言われる人物) の別荘であり、そこから何人かの手に渡ったのち摂政・藤原道長の別荘「宇治殿」になった。道長の没後、息子である頼通によって寺院に改められたのが平等院の始まりと言われている。

今回の訪問では、近年の平等院に関して宮城先生からレクチャーをいただいた。貴族の別荘を起源とする檀家のいない寺院、平等院をどのように成り立たせ、保護・改修していくかという経営的なお話は、宮城先生からではないと聞けないもので非常に興味深かった。

▲かつては平等院から宇治川と宇治神社が佇む山を眺められた

▲最勝院でのレクチャー

今までに類を見ない御自宅訪問が圧巻でした。宗教 / 思想の持つ力もまちに確かな彩りを創る発見多き旅行

平等院にて。両手に十円玉！計 40 円でこの笑顔！

▲特別に見学させていただいたお座敷。中庭の井戸が涼し気

中村藤吉本店

宇治における茶の歴史は鎌倉時代から始まる。宇治に茶をもたらしたのは、栄西から種を譲り受けたとされる明恵上人である。明恵上人は栂尾で茶の栽培を始め、栂尾の茶はその質の高さから「本茶」と呼ばれ、それ以外の茶は「非茶」と呼ばれるようになる。宇治茶も当初、「非茶」の一つであったが、茶の栽培に適した気候的・地理的条件を背景に徐々に名声を高め、室町時代後期には栂尾の茶を凌ぐ評価を得るようになる。

揺るぎない地位を獲得した宇治茶は、権力者たちから保護されるようになり、茶の湯文化が盛んになった安土桃山時代には街中に茶工場兼住宅が建ち並んだ。江戸時代には幕府直轄地となり、宇治の代官は「茶師」が務めるようになった。茶師は茶の生産者であり加工販売を行う特権化した町人身分で、上林春松家など約四十家ほどあったようである。茶師の家は宇治橋通り沿いに多く立地しており、特に東側に上位の家が多かったと言われる。

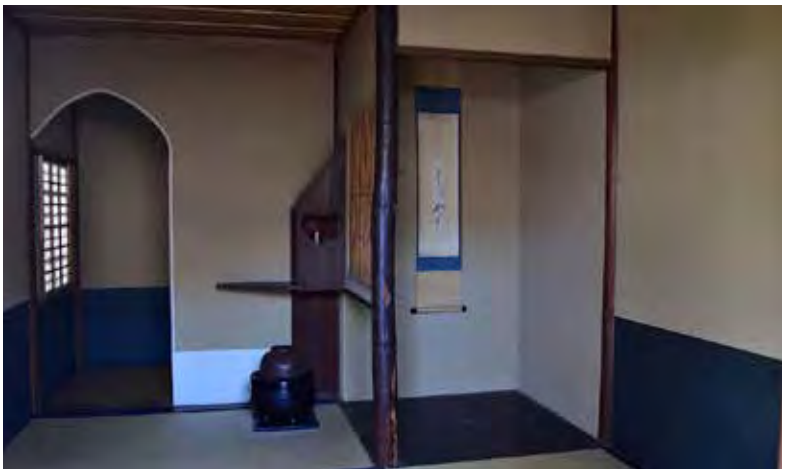
茶師は主に大名を顧客とし、抹茶を扱っていたが、明治に入ると、抹茶の需要は大きく落ち込み、輸出品としての煎茶の需要が高まった。これに応じて宇治は茶師の町から茶商の町へと変化を遂げることとなる。その例として挙げられるのが中村藤吉本店で、茶師の居宅を江戸時代末期に中村家が購入し、そこで茶業を興して誕生したのである。

今回は中村藤吉本店の通常は立ち入ることのできない茶室を見学させていただき、加えて居室で休憩もさせていただいた。天気に恵まれ非常に気温の高い日であったが、居室を通り抜ける風や中庭の湧水が創出する清涼な空気感の中で、宇治の茶、ひいては水の美味しさを堪能し、なんとも風流で趣深い時間を過ごすことができた。

お座敷にて。思い思いに過ごしつつ一体感のある雰囲気にデザ研らしさが出ている気がします。

中村藤吉本店のカフェへ続く中庭、夏！！！

▲お座敷から格子越しに通りを眺める



▲コンパクトにまとまった茶室。躙り口が無い様式だ

中宇治 yorin

中宇治 yorin は、中宇治と呼ばれる宇治の中心に位置づけられる地域に 2016 年にできた複合施設である。中宇治 yorin プロジェクトは宮城先生が携わる「宇治観光まちづくり株式会社」による、宇治で小商いを行う人を全国から募集し入居してもらうプロジェクトである。宇治における小商いネットワークの中核を担う存在と位置付けられており、観光客だけでなく地元の方々の利用も想定している。

今回はここに入居するフレンチレストラン「witte de with（ヴィットデウィット）」でディナーをいただいた。本格的な料理は非常に美味しく、一方で店構えは親しみのあるもので、中宇治 yorin のコンセプトに合致したお店であると感じた。店には小さなテラスがついており、天気のいい昼間にまた訪れて利用してみたい。

現在の宇治は中宇治 yorin を始めとして、様々な小商いが出現しているようで、宇治の歴史にこれからどのような「層」が重なるのか非常に楽しみである。そして、宮城先生が着任された都市デザイン研究室と宇治との関係にも注目である。

▲美味しい料理とお酒と共に語らうひと時

夕暮れの中宇治

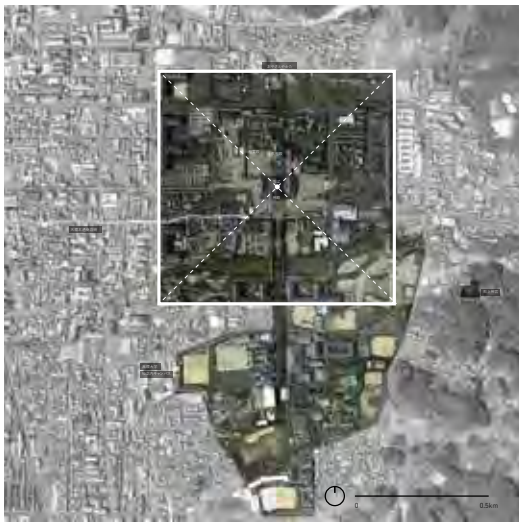
▲中宇治は町工場のリノベーションである

DAY2-2　天理

text_YAGAWA/ M2　SUNAKAWA / M1

天理市は日本唯一の宗教都市であり、巨大建築群が描く壮大なマスタープランは世界的にみても珍しい。また、宗教の思想がそのまま現実的な空間に翻訳されていることも特筆すべきであり、コンセプトとデザインがシームレスにつながる様を体感することが訪問の目的である。今回は、天理教会本部の神殿、教祖殿、祖霊殿を訪れた。

▲▶天理のまちを囲むおやさとやかたはその一部が実際に建設されている
図：五十嵐太郎『新編新宗教と巨大建築』ちくま学芸文庫



教義と建設

天理教は1838年に中山みきが創始したものである。天理教では、親神の救いにより、現世に「陽気ぐらしの」ユートピアを実現することを目標とし、それへの道筋を建設に例えて「普請」と呼ぶ。おふでさき（教義となるもの）にはいくつかの空間概念が示されていて、天理教はそうしたテキストの解釈を通して、実際の建設を行ってきた。

天理教には「ぢば」とよばれる、世界の中心を示す概念がある。ぢばは固定されていて、甘露台とよばれる柱がその位置を示す。おふでさきでは、ぢばは人類発祥の地とされていて、後継者はぢばを中心とした建築と都市の造営を行ってきた。天理教には、「切り無し普請」という概念があり、これは教団の拡大に伴う途切れない建設のことをいう。

今回訪れた天理教の建築群はぢばを中心として周囲に膨張するように設計されていて、このマスタープランを「おやさとやかた計画」と呼ぶ。この計画では連続した68棟のおやさとやかたと呼ばれる巨大建築によって、一辺が八丁（約872 m）の正方形の線上をつなぐ。建物は地形を無視して建てられていてる。現在は２６棟が竣工していて、教義研究、教育施設、病院、詰所（信者用の宿泊所）など、さまざまな目的に使われている。正方形の対角線の交差する中心点に甘露台を神殿の礼拝場が四方から囲み、回廊によってつながった神殿、教祖殿、祖霊殿をおやさとやかたが囲む。このようにぢばを中心とした都市デザインが徹底されている。

▲おやさとやかたは帝冠様式のような独特の様式を持つ

東大と天理教

現在の天理教会本部は大正普請に、現在の天理市の景観は昭和普請にかたちづけられた。昭和普請を指揮したのは二代間柱の中山正善で、設計顧問を務めたのは、東京帝国大学建築学科教授の内田祥三である。内田が最初にした仕事は、1934年に発表した総合学校計画である。戦争によって、第一期の天理中学校（現在の天理高校）しか実現はされなかったものの、内田のキャンパスプランの特徴であった南北の軸線は前述した「おやさとやかた計画」に踏襲された。おやさとやかた計画を実質的に担当したのは、東京帝国大学工学部の建築学科を卒業した信者の奥村音造であった。このように宗教家と建築家がコラボレートすることによって、宗教のコンセプトが建築と都市のデザインに落とし込まれた。

▲教会本部から南方、天理小へのビスタ。天理小はおやさとやかたの一部をなす

▲教会からに伸びる本町通り。夕方のためお店は既に閉まっていたが、普段は活気がありそう

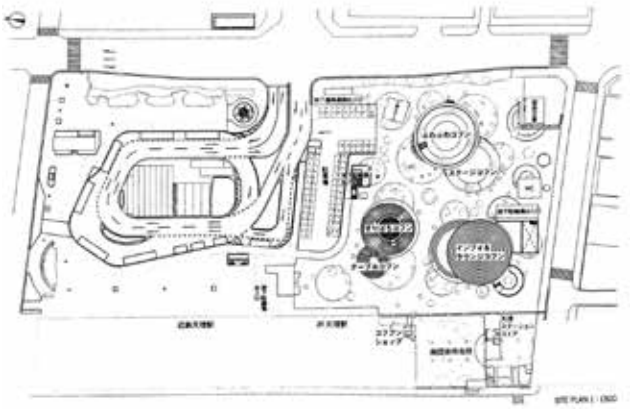
西から天理教における中心の建物である天理教教会本部へ向かう道、そして教会本部から南方向に天理小に向けても、美しいビスタ。計画都市であるということを強く意識させられる。

一方で、参拝が生活に根付いているということを実感する、参拝に来ている若いお母さんと子供の姿も印象的であった。

神殿においては、東西南北すべての面から参拝できる構造。事前調査で頭でわかってはいたが、各方角に人がおり様々な方向から参拝の声が聞こえるのは、実際に体験すると不思議なものである。神殿、教祖殿、祖霊殿を繋ぐ一周800mもある回廊は、サッカーコートにも十分なほどの中庭を囲んでいた。贅沢な空間の使い方だ。

教会本部を去り、駅に向かうためアーケードを通る。見慣れたスケールの店舗、神具を売っているお店、自転車で走る高校生。なんとなく馴染みの風景にも見えた。

宗教都市としてのスケールは大きいが、それが生活に溶け込んでいる、そんな街だと感じた。



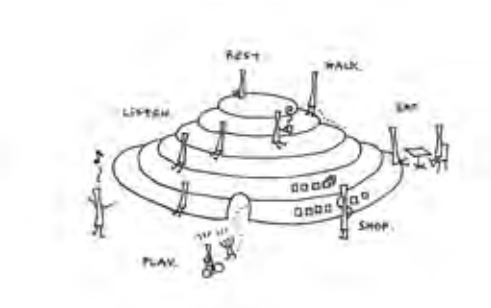
▲ CoFuFun 全体平面図
商店建築 2017 年 11 月号 p160

CoFuFun

最後に訪れた天理駅前広場コフフンは、土地の読み解きと空間デザインの関係性が明快であった。設計はプロダクトデザインでも有名なnendo が担当した。

特徴的な起伏のあるこの広場からはすぐに古墳が連想される。同市には約 1600 基もの古墳が点在しているが、それらは日常の風景のなかに溶け込んでいる。ドーム建築が集まって作るランドスケープはアイコニックであったが、そこで行われるアクティビティは極めて日常的であった。古墳の段差は階段として機能するだけでなく、ベンチになったり、屋根になったり、ステージになったりした。場所ごとに機能は限定されておらず、様々なアクティビティが緩やかにつながる様子がプランからもわかる。私たちも到着するや否や、すぐに休憩する場所や遊んでみたい場所を見つけた。

ここまで、特徴的な形をしていると、なぜこのような形をしているのだろうか？と大抵の人は気になるだろう。来場者に古墳について気づかせ、市のアイデンティティを顕在化することにこの広場は成功していると改めて感じた。



コフンで想定されるアクティビティ (商店建築 2017 年 11 月号 p160)

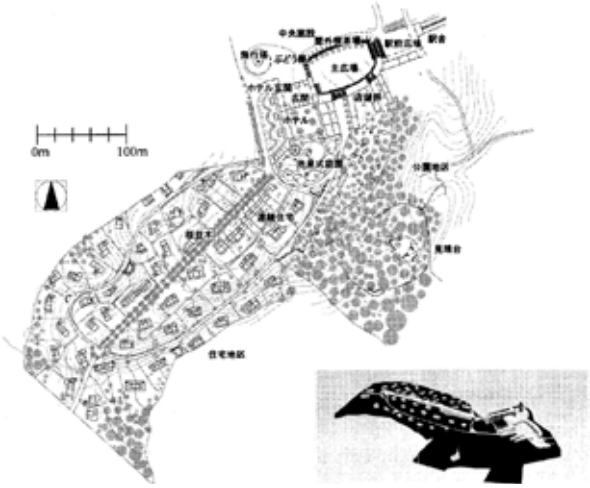
CoFuFun に到着するやいなや、気が付いたら登ったり座ったり……

CoFuFun で
カマキリと交信！
とまらない宗野ワールド。

DAY3　生駒・山崎

text　SENGOKU/ M2　MUNENO / M1

２泊目は生駒・宝山寺の門前にある宿へ。宝山寺の門前町としてスタートした生駒のまちは生駒ケーブルの開通と共に別荘地として、さらに郊外住宅地として発展した。山崎は近世から交通の要衝として栄えたまちであり、藤井浩二が環境建築の理想、近代一般住宅建築の理想を追い求めた地でもあった。



▲「生駒山嶺小都市計画」全体配置図
杉本俊多 , & 中野友紀子 . (2005). 918 ブルーノ・タウトの「生駒山嶺小都市計画」案の造形手法とその歴史的意義について (建築歴史・意匠). 日本建築学会中国支部研究報告集 , 28, 949-952.

▲現在の生駒山上遊園地

生駒山上遊園地

生駒山の山頂は建築家ブルーノ・タウトによる「生駒山嶺小都市計画」の対象地である。対象地にホテルと小住宅団地を整備するこの計画は 1933 年に完成したが、実現にはいたらず、対象地は現在遊園地となっている。計画の全体構成としては、ケーブルカーの終点駅前に大きな広場を設け、それに隣接して南北に長いホテルを配置。北東から南西に約 250m の桜並木道を設け、これを背骨のようにして高い位置に一棟の連続住宅、周辺の斜面に住宅群が展開している。計画では敷地からの眺望を重視しており、一見バラバラとして見える戸建住宅の配置は、各戸の眺望や日照を考慮した詳細な検討によって導かれた最適解である。

生駒山のマンホールにも
ブルーノ・タウトの道は
描かれていました！

漫然と永遠に続くように思えた大部屋呑みを終え、一足先に帰路に。生駒の坂道の静寂は心地よかった。

生駒の宿への入口の
ネオンサイン、なぜか懐かしい感じがします

生駒にて。高いところから都市を見る。それは西村先生の教えらしい。たしかに発見がたくさん。

▲生駒山嶺小都市計画は現在の園内の道として引き継がれている

▲フェンスが無く周辺既成市街地とシームレスにつながっている

萩の台

奈良県生駒市はパタンランゲージを用いた特徴的な景観ガイドライン「生駒市景観形成基本計画」を定めている。基本計画は、生駒の魅力である何気ない日常の風景を保全するため、その風景の魅力とは具体的にどのようなものか、それらはどう生まれているのかということを市民と共有することを目的としている。シンボルである生駒山への眺望や住宅街の緑の配置、集落の構造などをパタンとして挙げ、それらの組み合わせによって景観づくりをする。研究室旅行では、基本計画に具体例として載っている場所が多く存在している萩の台地区を訪れた。

写真撮影場所は、階段の登りきった先にアイストップとなる木が植えられていることや、階段の左右に植物が多く植えられていることが特徴的であり、「パターン６　緑にとけ込む建物」「パターン 12　坂道の見上げと見下ろし」が当てはまる空間を観察できた。

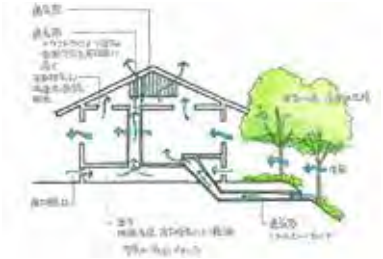
▲パタンランゲージの一つ、階段の先のアイストップ

▲萩の台地区は 1980 年代に山を切り開いて造成された住宅地である。山あてに加えて「パターン 24　表出する緑」が良く分かる

▲生駒市景観形成基本計画

▲緑に囲まれた聴竹居。その環境工学には周辺の緑も計算に含まれている

アサヒビール大山崎山荘美術館「地中の宝石箱」。奥に誘うような縦に己の軸のブレを見る。



▲聴竹居の中での下から上への空気の流れ
http://www.watanabe-homes.co.jp/sblog/?p=8298

聴竹居訪問前、長岡京のマンホール。これも竹です。

▲聴竹居訪問後、研究室旅行は解散となった

聴竹居

天王山の麓に 1928 年の創建時と変わらぬ姿で建つ「聴竹居」は、建築家・藤井厚二の５つ目の自邸である。

藤井は東京帝国大学で建築を学んだのち、竹中工務店を経て京都帝国大学に着任する。日本において当時取り組まれていなかった環境工学の分野を切り開き、天王山の麓に所有する広大な敷地の中で自らの住宅としてそれらの知見を実践していった。

また藤井は竹中工務店退社後のヨーロッパ視察で多くの建築に触れ、フランク・ロイド・ライトをはじめ西洋の住宅建築に強い影響を受ける。帰国後は椅子座と床座の問題をはじめ西洋化・近代化を巡って多くの齟齬を抱えていた日本の住宅に対し、あくまで和風の建築としてそれらを解決しようと試みた。聴竹居は洋風、和風、そしてモダニズムをも取り込んだ、藤井が行き着いた「日本の住宅建築」のひとつの答えである。

松隈章氏を代表とする「聴竹居倶楽部」による保全・活用の取り組みも特筆すべき点である。藤井が所有した土地は住宅開発が徐々に進められたが、そこに暮らす地元住民がこの倶楽部に参加し、ガイドをしながら運営を行っている。ひとつの建築がきっかけで地域のネットワークが形成され、その組織が自律的に活動を続けているその姿は、大山崎の小さなまちづくりとして実を結んでいると言えるだろう。

中に入ると居間を中心として居室、客室、食堂、縁側が一体的に連なり、居間を核として人々が集う空間が形作られていた。一方で緻密な高さのコントロールが空間に変化を生み、家族がお互いを邪魔することなく一つの空間を共有できる仕掛けが感じられた。

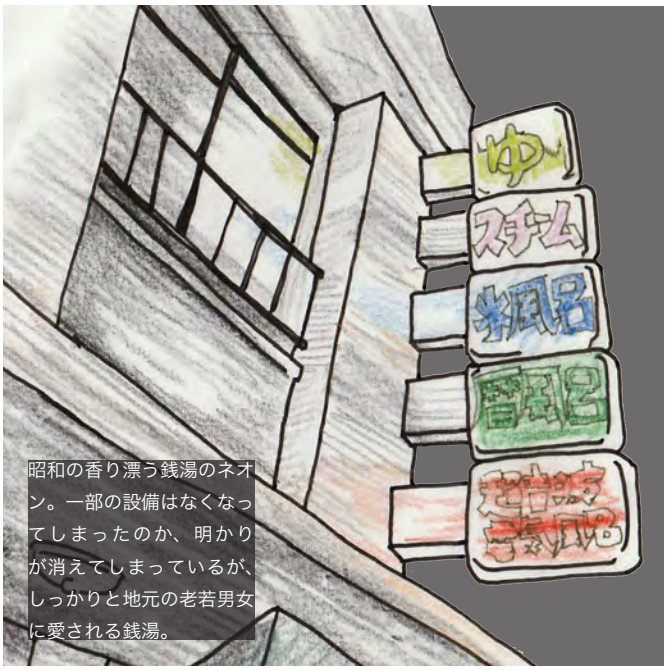
聴竹居は地中で冷やした空気を吸気、天井裏を通って屋根裏から排気と自然換気を行うパッシブハウスである。実際に真夏の昼下がりでも冷房なしで滞在することができる快適さで、しばし眠りに落ちる学生もみられた。

藤井は家具や照明も全て自ら設計し作り付けで完成させるなど、住宅の中で営まれる暮らしそのものをデザインしようとした。今回それらの意図を全て感じ取ることができたかはわからないが、高気密・高断熱で動的に住環境をコントロールする現代の住宅へのアンチテーゼとして、また和洋折衷の暮らしへのひとつの答えとして、環境共生の考え方や住宅建築そのものについて再考する良い機会であった。

研究室旅行よりみち絵日記

The Pieces of Summer Diaries in the Lab Trip

text_YAMAGUCHI/M2



昭和の香り漂う銭湯のネオン。一部の設備はなくなってしまったのか、明かりが消えてしまっているが、しっかりと地元の老若男女に愛される銭湯。

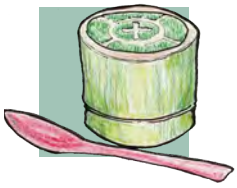
よりみちも旅の醍醐味の一つ。今回の旅行は、あくまで研究室旅行として、新たな知見を得る学びの旅である。しかし何気ない風景の一つひとつが旅を彩り、私たちの血肉になっていくのではないだろうか。学生最後の夏の終わりが近づく中、最後に旅行の一コマを切り取ってみたい。

中藤吉本店見学の際に頂いたほうじ茶。おちょこサイズの紙コップだからこそ、一口一杯の香ばしさが味わえるような。

たねやグループのどらソフトと、バウムソフト。ラ・コリーナ建設を支えるお菓子たち。敷地内では新プロジェクトも進行中の様子。

じつは一部の学生が見学していた山崎蒸留所。駅からも近く、気軽にジャパニーズウイスキーの神髄を楽しむことが出来る。行きそびれた方々は次回に是非。

中村藤吉本店カフェでいただいたパフェや宮城先生一押しのかき氷など。ボリュームたっぷりで、老舗茶商の和スイーツに舌鼓。



Information

ついに上半期が終了し、夏休みに突入した都市デザイン研究室。授業などはありませんが、各々プロジェクトや各自の学習などで忙しい日々を送っているようです。

Hey listen, -ちょっと聞いて！

7.31-8.9　バンコク WS

At the beginning of August, 18 students from the U Tokyo and Chulalongkorn University collaborated in investigating urban environmental issues in Bangkok. It was a valuable opportunity for us to understand the current environmental problems there. We made some proposals to the Thai government after surveying the locals. (M1 Miao)

8.24　浦安 PJ　空地調査実施

浦安にて空地調査。溢れ出しに影響しそうな開口の数や通り抜けを調べました。自治会のお祭りに遭遇！ (M1 應武)

8.11-13 手賀沼 FC 納涼祭り開催！

手賀沼PJで改修設計を進めてきた手賀沼フィッシングセンターで 8/11-13 の 3 日間、納涼祭りが行われました。デザインした空間が人々に使われていてとても嬉しいです。(M1 松本)

8.28　上野 PJ　池之端仲町ミーティング

第 5 回勉強会が開催されました。今回は企画書をもとに、イベント当日の注意点や告知方法、アンケート方法等について話合われました。(M2 小田島)

8 月の Web マガジン

http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/ja/blog/

8 月 富士吉田 PJ「夏のまち工作」開催！

夏の一大企画。旧郵便局の改修、行燈の絵付けと一斉点灯、駐車場の居場所づくりを行いました！ (M1 宗野)

8.27-31　三国 PJ 夏期集中調査！

福井工大の皆さんと合同で旧市街のサイン悉皆調査を実施しました。まちを歩き尽くす濃密な調査です！ (M2 前山)

9 月の予定

Lab Meeting 24th

- 1st	三国 PJ　現地調査
3rd - 6th	建築学会大会 @ 金沢
20th-21st	アーツ & スナック運動 @ 池之端仲町
24th	9 月追い出しコンパ

編集後記

野暮用で宿を抜け出して早朝の生駒をふらつくと、谷の奥に小さな県営住宅が収まっていた。暑さに参った私はコモンの木陰へ。4-6m ほどの心地よいスケール感に気が緩んだのか、果たして私は研究室旅行を有意義なものにできているだろうかと急に不安になる。

今回は事前に下調べをした上で現地を訪れているが、こんな小さな県営住宅は見つからなかった。下調べをすると、とかく点的な行程になりがちだ。地図だけを頼りにふらふらと歩いたからこそ見つかるものもある。どちらも有意義なものになりうるのだろうが、私はこれまで後者ばかりをしてきたから、今回の研究室旅行をマネジメントし切れなかった……

むっとした熱気に、汗が滴り落ちた。(M1 應武)